ARGUS de la PRESSE
21, Bd Montmartre — 75002 PARIS
ジュノン
JUNON (M)
'78. 8. 月
P.84
Paris Biennale
A

男の本音とつきあうとき

興味を持たない男性というのは、表面的にはいかつくても、本質的には女性的ね。ということは現実的なところが強くて、理屈を求めるタイプね。女性っていうのは、理屈を求めるというところがあるでしょう。

わたしの仕事は前菜からすぐデザート 男の人のはフルコースなのに

山口 きょう横尾さんの展覧会を見てきたばかりなの。とにかく圧倒されちゃってなんにも言えないような感じで……。ああいうふうにまとめて見ちゃうと、よけいに男の人のほうがすぐれているというのが当たっているのか、またはわたしが個人的にすごくダメなイラストレーターで、その差でそう感じちゃうのかわからないけど。男―女の対比で視野の広さとか心の深さ、つまり心にいだいているロマン――そういったすべてに女であるわたしが劣るというのか、なんかほんとマイッチヤッタ！　って感じなの。

横尾 それをはるみさんに言われるとうれしいと同時にテレちゃうね。同時に今の言葉がうちの女房から出ると、うれしいんだけどもね(笑)。ただね、ぼくは仕事をたくさんやってるように見えるけれども、やっぱり何かに追っ立てられるという強迫観念があるみたいね。

山口 同じようにわたしも強迫観念があるように言ってるけれども、出てくるものが全然かけ離れているというか……。

横尾 もしかしたら、そこにぼくの姿を見ているというより、むしろ男性というものを見ているのかもわからないね。でも、ほめ返すのも変な感じがするけれども、はるみさんの絵はおそらく何日間もかかるだろうし、根気よく最後まで完成される、あの忍耐というのは、女性でなきゃあ持ってないんじゃないかというふうに思うんですよね。

山口 わたしの仕事は食事でいえば、前菜からすぐにデザートっていうぐらいのものに感じて、たっぷりフルコース、満腹っていう仕事はやはり男の人に多いのね。

横尾 男・女で分けられるかしらね。最近は男とか女とかに区別できないところに来てるんじゃないかって気もどこかでする。あまり領域がはっきりしてないというか……。

山口 たとえば、わたしは男の人が熱中する遊びにわりと参加してるしね。

横尾 マージャンやったり、お酒飲んだり、ゴルフやったり。

山口 無益と思われるような遊びの中で、一人でなくて何人かと、仲間とか友だちなんかとふれ合うときに得られる何かっていうのは、すごく大きいでしょう。

横尾 ぼくはその点、没交渉的なところがあるんですよ。昔はそうでもなかったんだけど、最近そうなのね。だから、たまに人に会うと、すごく新鮮な感じがするわけ。車の中から街の風景を見ると、女性が非常に美しく見えるし、男性がみなカッコよく見えるしね。

新鮮な感じと同時に、驚きもあるし、恐れもあるね。

結婚しないでどんな愛の形をとってゆくか―それが女のロマン

横尾 どういう男性がいいですか？(笑)

山口 やっぱり尊敬できる面がないとね。そういうのを含んで愛情があるんじゃないかしら。でも、どんな男性とても、いま結婚という形式をとることは考えられない。結婚しない中でどんな愛の形をとっていくか――これは女のわたしのロマン(笑)。

横尾 ぼくは蟹座なんですよ。蟹座というのは非常に家庭的な性格を持っているらしい。男にならないで女に生まれたほうがよかったのかもわからない(笑)。だからってわけでもないけど、離婚のチャンスはあったかもしれないが、家庭を破壊させようという気持ちはないね。めんどくさい、こわい、臆病だ、子供がかわいそう――いろんな理由があってね。しかし、今のきらいな自分自身を破壊させようとか、自分でてき上がってきた創作の一つのスタイルね、自分をがんじがらめにする一つのスタイル――それを破壊させようという気持ちは強くて、ぼくにとってのロマンかもしれないね。

山口 みんな一人が個としてどう生きるかってことがまずあっても、結婚の場合だと平行線のようでも重なり合う部分がある。それはそうなんだけれども、もっと一人が出会うというのが自然に許されてもいいんじゃないか、と。

横尾 そういう発想が出てくるところに結婚生活の問題点があるのかもわからないね。

山口 自分の死ぬまでの生き方の理想みたいなものを考えると、妥協みたいなことで費やさなきゃならないいろんな重いカセを自分流にとり払うと、個としてずっと生きてしまうみたいなことが、人によってはもっと許されてもいいんじゃないか。結婚が主流で、そうでないのはみんなはみ出しというんじゃなくて、反主流として認められるというか、そういうふうになるといいなという気がある。

横尾 ぼくなんか、やめるのもめんどくさい。じゃどうしようかというと、それを改善しようとするわけね。結婚という枠の中で不自由になるんじゃなく、結婚という枠をもっと広げて、それ自体を自由にさせようと思うわけ。まあ、男と女のそれぞれのエゴのぶつかり合いで、なかなかむずかしいけど……。

山口 女の人は結婚という枠の中にいると、それを拡大していくというようになかなか考えられないんじゃないかって気がするの。だから、離婚して、ずいぶんたって、今やっとそういうふうに考えているわけで……。形式

横尾さんは、自分の描いたイラスト入りのTシャツを山口さんに贈った。

よこお・ただのり　1936年、兵庫県西脇市生まれ。西脇高校卒業後、神戸新聞社、ナショナル宣伝研究所、日本デザインセンターに勤務。'61年、東京ADC銅賞入賞、'69年、第6回パリ青年ビエンナーレで版画部門大賞を受賞、以後、ニューヨーク、ハンブルク、アムステルダムで個展を開き、その新鮮な画風で世界的グラフィックアーチストの地位を確立。UFO、禅に興味を持ち、最近『我が座禅体行記』を出した。他に『インド』『箱船から一羽の鳩が』などの著書がある。

やまぐち・はるみ　島根県松江市生まれ。東京芸術大学油絵科卒。西武百貨店宣伝部嘱託として婦人服広告のイラストを担当していたが、'67年、フリーランスのイラストレーターとなる。'69年にパルコ、'74年にマンズワインの広告イラストの仕事を始める。現在、レコードジャケット、書籍カバーのイラストと幅広く活躍し、最近、初の作品集『HARUMI JAIS』を出したばかり。おもに女性のエロチシズムを描いてきたが、「これから何をやりだすかわからない」と言う。

というものから、男の人のほうがずっと遠くへ飛べるんじゃないか、離れられるんじゃないかって気がするんだけど。

横尾 考えてみると、ぼくは男性はわがままだと思いますよ。奥さんに家庭を守らせておいて、自分自身は外で何かをやっていて、〝男のロマン〟だなんて言ってる。そして、奥さんに都合の悪いこと、バレちゃいけないことは、絶対に報告しない。そういう意味でまだまだ男性社会ね。

でも、ぼく自身の仕事のことに関して言うと、女性の直観力を利用してるっていうか信頼してるね。作品を作って自分で決定しかねるときがあるんですよ。男性のプロと女性のアマチュアのどっちに聞くかというと、それは女性を好きだからというんじゃなくて、女性のアマチュアね。男性は、ぼくの回答を予期して計算ずくの答えをするんだけど、女性はそんなこと飛び越えて、いきなり直観的、動物的、本能的にポーンと言ってくれる。

年のせいかもしれないけれど 「女はみんな乙女なり」の心境だな

横尾 昔の傷口をほじくるみたいな感じだけど、十年ほど前に高倉健を描いたことがある。確かにいい男ですね。自分の理想的な男性像を浮かべて、できればそういう男性に、自分があやかりたい、あるいはそうなってみたいという願望だと思うんですよね。ぼくなんか、特に自分自身がきらいで、だから自分が変わりたいという気持ちが常にあって、ぼくの外に理想の男性のそういうイメージを持つことが多いですね。

山口 最近、特にアイドルっていうか、男の人で見つめていたいような人いますか？

横尾 さっきの話と矛盾するようだけど、今いちばん興味があって見つめていたいのは自分なのね。今までビートルズにしろ健さんにしろ、外の人をずいぶん見つめてきたけれども、あくまでも他人は他人で、ぼくが病気したからって治してはくれないし、うちの中のごたごたした問題を理想の男性が解決してはくれないし(笑)。ぼくは自分が救済されたいという気持ちが常にあるから、人物に限らず外にいろんな対象を求めてきたし、求めるんだ、と思う。

山口 男の俳優さんとか歌い手さんとか、男もまぜてお酒飲みながら、「だれがいいかなあ」なんてワイワイやったりすると、男のアイドルと女のアイドルはたいして差がないと、女のわたしは思うわけ。わたしに関していうと、今はほれているという感じで見るんじゃないのね。ながめていて、ただひたすらに気持ちがいい(笑)ってアイドルはいっぱいいるわけ。しょっちゅういるわけ。

横尾 はるみさんの絵を見てると、女性を男性の視点から描いてるね。男たちが視線をおそらく胸元に持っていくだろうとか――そういうところに力を入れて描いているわけですよ。男性の目で女性をごらんになってるのか、自分の肉体をナルシスチックに見てるのか、そこがよくわからないですね。

山口 自分の肉体はナルシスチックには見られない。イヤだなという気持ちばっかりで自分の顔や姿を見ているんで……。

横尾 この前、池田満寿夫と話してて、彼うまいこと言ったのね。「理想の女性なんて一口に言えない」と。「本人を目の前に連れてきてくれないとわからない」と。見れば、ああ、この人は指が美しいとか、目がきれいだとか言えるから、実際にそこにはっきりした対象がないとわからない。

山口 ずっと若いころ、一時期ミック、ミックって呪文のように唱え、ミック・ジャガーのことを好きだ、好きだみたいな感じでいたのね。そういうときに、ミック・ジャガーとマリアンヌ・フェイスフルがいっしょになったなんて聞いて、もうイヤな気持ちになるらい好きだったりして……。

横尾 その相手の女性は、はるみさんにとって、きらいなタイプの女性だったわけ？

山口 ううん、そうじゃなかったのに、なんとなく……。

横尾 じゃあ、わかった。女性っていうのはアイドルを心のどこかで結婚の対象にしているところがあるのね。おもしろいね。

山口 アハハハ。そういう時期があったけど、今はもうそういう時期じゃないわね。もっと瞬間瞬間に、〝今の感じはいい〟とか、〝すごくきれいだ〟とか……。だから、移ろいやすくなっているというか。いくら美しくても同じようなものをパターンのようにしょっちゅう見たら感じないだろうし。

横尾 ぼくもね、年のせいかもしれないけれども、昔のようにはっきりしたイメージがなくなったね。女性だったら、だれでもいいという感じがしちゃうわけ。極端な表現だけれども(笑)。芭蕉の「女はみんな乙女なり」の心境、といえば言いすぎになるかな。

だれでも魅力的だと思うのね。たとえば、足のきたない人がいるとすれば、足のよごれた部分にその人の生活感とか、なんか生き方を感じてすばらしいなと思ったりね。足のよごれに神経つかわないで、それでも堂々と生きている人ってすばらしいなというふうに。

山口 そういうことは、今になって言えてもね、二十歳のときには言えなかったでしょう。

横尾 むしろ若いときのほうが、自分のイメージで自分をがんじがらめにしてしまってるよね。

山口 そういう感じ。

横尾 若い人はもともと自由でなけりゃいけないのに、自分で固定観念の中に金縛りになってるね。

宇宙的でないから、ロマンチックになり宇宙に興味を持つのが男

横尾 ぼくの最高のロマンは超越した人になってみたいってことね。ここにある問題が起こるとしますね。普通、自分のつくり上げた概念で、その問題をいじくり回して、これはイヤだ、あれはいいというでしょう。問題自体はなんの変わりもないわけ。だから、それをすんなり受け入れてしまう人間になりたいとぼくは思う。なぜロマンかっていうと、ぼ